

コロナ禍における保育士養成校のピアノレッスン

—ARCS モデルにおける自学自習支援と KH Coder による考察—

Piano lessons at a nursery school in Corona disaster

—Self-study Support in ARCS Model and Consideration by KH Coder—

丹羽 裕紀子

愛知みずほ短期大学

Yukiko NIWA

Aichi Mizuho Junior College

キーワード: ピアノの自学自習; ARCS モデル; KH Coder; コロナ禍; サブスク型ピアノレッスン

Key Word: self study of piano; ARCS model; KH Coder; Corona disaster; Subscribed piano lessons.

I. はじめに

2020 年初旬, 世界全体の新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の感染者数が激増し, COVID-19 の大流行する危険度が最高レベルに引き上げられた. 日常生活に関わる前代未聞の外出自粛要請や緊急事態宣言が発令され, 2020 年 1 月中旬, 新型コロナウイルス (SARS-CV-2) による感染症が日本でも拡がり, 2020 年 2 月下旬から 3 月にかけて, 感染拡大防止の観点並びに学生の安全を考慮し全国の幼稚園・小中高等学校・特別支援学校が臨時休校となった. 2021 年は新しい変異株ウイルスの出現が世界全体を震撼させており感染への警戒は続いている. 世界保健機構(WHO)は, ワクチンだけに頼るのではなく, これまでとは違う行動や新しい生活スタイルを求めている¹⁾.

2020 年度春学期は, 本学のピアノレッスンの授業もオンラインで実施されることになった. ピアノレッスンにおいては対面であっても自学自習することが技術向上に大事な要素であるが, オンライン授業であると, なかなか指導が行き届かないという問題が生じる. そこで, その問題を解決するために, 近年注目されている ARCS モデルに基づいて, 指導内容を考案し, オンライン授業を行うことを検討した. 本研究では, 実際に ARCS モデルで捉えた指導法を行い, オンライン授

業を行った結果についてアンケート調査の効果を検討する.

本稿では, まず OS や情報機器が進む現代に, なぜ, 保育現場ではピアノの生演奏の音楽が必要であるか, 保育における音楽の必要性を述べる. そして保育士養成校の学生が, 自己の目標に向かって自学自習でレパートリーを増やすためには, 教員側がどのような指導で学生が学習意欲を高め, ピアノレッスンに向き合うことができるのか明らかにするために, ARCS モデルでピアノレッスンを捉える.

ARCS モデルは, 音楽の分野での実践例は少ない²⁾が, 学習者が主体的に取り組む中, 各国で研究者や実務家が研究と実践の一環として採用している³⁾. そして1年間ハイブリッド型でピアノレッスンを受講した学生が記述した感想を KH coder で分析し考察する.

II. 保育現場での音楽

保育現場では様々な場面で音楽を使った活動が行われている. 朝の歌やお弁当・帰りの歌に至る活動を示す日常生活の歌, 季節の歌, 行事の歌, 体操の時の音楽など生活と密着して音楽が用いられている. 保育者は, 幼児が感じたことや考えたことを自分なりに表現し, 豊かな感性や表現する力を養い, 創造性を豊かに

する⁴⁾ことを達成させたいねらいとして活動を考える。

幼児期の間は成長発達の個人差の幅が広いことから、共に育つインクルーシブ保育の中で、音を楽しみながら音楽体験することから始め、自分なりに表現することが大切である。

保育士は、幼児 1 人 1 人の感性や表現を受け取り、個々の音楽性を大切に、創造性を育み、多様なニーズや多様な表現に対応できることを目指している。

そして、保育現場での音楽活動は、音楽する喜びを体感し音を楽しむことを原点に、音楽レクリエーションや音楽表現、音楽教育、音楽療法などの連続体としての音楽活動⁵⁾から発展させていくことを必要とされている。

Ⅲ. 保育における生演奏の重要性

保育現場でのさまざまな音楽活動には、CD など既成曲の音源を用いたり、最近では、簡単にスマートフォンから音楽を提供したりすることもできる。しかし、なぜ保育士による生演奏でピアノを用いることが必要なのだろうか。

幼児は発達の個人差の幅が広い、月齢の小さいクラスでは同じ朝の歌でも少しテンポをゆっくり目に、言葉をはっきり発音して弾き歌いすることが大切である。ピアノ伴奏の工夫で月齢に合ったテンポや間を取る事ができることから、幼児が歌いやすい演奏となる。また、保育士が歌うことで、言葉を認識し、歌詞の内容を、言葉の抑揚から歌の持つ意味を理解していく。このように保育士の生演奏は、1 つ 1 つの音楽的要素が幼児に合った音楽の支えとなったり、自分なりに表現したり創造性豊かな音楽体験となる。

保育での音楽活動では、ノンバーバルなコミュニケーションとして音楽を使うこともできる。乗りの良い音楽に合わせて身体を動かしたり発散したりする時に既成の音源は適しているが、その場合、幼児が音楽に合わせることが前提となり、音楽が先に進んで行ってしまうことも想定して使う必要がある。日常保育の中で幼児が音楽に親しみ、音楽性を豊かに育むには保育士のピアノの生演奏は大切なことである。

その演奏を担う保育士養成校の学生は、入学時にはピアノ経験の有無によって技術的に差がある。そのため授業は個人レッスンとなっており、学生は自分の順番が来るまで練習して待っている。ピアノレッスンの授業を受ける目的は、保育現場で活用できる演奏技術を身に付けることであるが、課題曲も 1 人ずつ異なり、自己の目標に向かって自学自習を行うことが必要となる科目である。

Ⅳ. コロナ禍におけるさまざまなオンライン授業

1. オンライン授業

2020 年度春学期は多くの大学・短期大学でオンライン授業をスタートしたが、本学の「音楽」の授業(以下、ピアノレッスン)もオンラインで行った。

大角(2021)によると、オンライン授業にはリアルタイムのライブ配信でインタラクティブに行う「同期型」、LMS (Learning Management System) 等を活用したオンデマンド・資料・ビデオ・課題にアクセスしてもらう「非同期型」、両者をバランスよく組み合わせた「ハイブリッド型」がある⁶⁾。また、同期型・非同期型を組み合わせたハイブリッド型には 3 種類あり、同じ授業を対面とオンラインで同時に行う「ハイフレックス型」、対面とオンラインの教育効果を考えて組み合わせる「ブレンド型」、同じ回に異なる内容の授業を対面で行い、学生は分散して受講する「分散型」がある⁷⁾。このようなオンライン授業について仲道(2020)は、「同期型・非同期型の特徴を理解した上で組み合わせや学習目標ごとに使い分ける工夫を行うことで、対面授業と同等もしくはそれ以上の効果を上げることが可能である⁸⁾」と述べている。

2. コロナ禍におけるピアノレッスン

本学のピアノレッスンの授業は、個人レッスンで行われており、保育士を目指す学生が保育現場で用いることのできる基礎的なピアノ演奏と弾き歌い技術を習得することを目的としている。学生は、ただ上手く演奏することや歌う技術向上だけではなく、実際の保育と結びつけて現場を想定した演奏スキルを習得することが必要である。

さまざまなオンライン授業があるが、講義型ではなく自学自習が必須なピアノレッスンは、学生がピアノに向かえるよう学習意欲を高める指導をすることが課題である。毎週、対面授業ができる場合は、学生と教員のコミュニケーションが会話の中で取れて、質問などはその場で解決することができた。しかし、コロナ禍のオンライン授業では、対面の時のように質問があっても指導が受けにくい状況となった。

そこで本校の 2020 年度ピアノレッスンでは、3 通りの方法を用いた。1 つ目は、週 1 回の授業時間は、リアルタイムのライブ配信でインタラクティブに行う「同期型」で個人レッスンを行った。2 つ目は、学生は授業外に何度でも、チャットやメールなどの通信を用いて、演奏動画や楽譜等を添付する動画レッスンを受けられるサブスクリプション(以下サブスク)のような「サブスク型」でレッスンを行った。3 つ目は、COVID-19 による緊急事態宣言の規制緩和になった時期に、対面とオンラインの教育効果を考えて組み合わ

せる授業方法「ブレンド型」のレッスン形態も学生に提示し、希望者には補講として行った。

このような形態を通して行った結果、学生はコンスタントに練習を行い、ピアノ初心者であってもバイエル修了程度まで弾くことができ、曲数は個人差があるものの弾き歌いのレパートリーを増やすことができた。以下、各レッスン形態について簡単に紹介する。

2.1. リアルタイム同期型ピアノレッスン

学生は学校の授業用 Teams から入り、教員とリアルタイムでつながる。学生側も教員側も鍵盤と手が写るように OS を設置し（写真 1）、手とピアノの鍵盤が見えるようにカメラを設置した。

写真 1. 自宅で授業を受講している学生



授業で鍵盤を使用することから、ピアノレッスンを受講する学生は全員自宅に鍵盤楽器と、スマートフォン、iPad、パソコンなどの OS を準備した。

リアルタイムでのピアノレッスンでは、対面の時と同じように指使いや正しい運指ができていないか、音の間違いがないか、音楽的に演奏できているかなどの指導を行うことができた。演奏がたどたどしく弾きにくい箇所や止まってしまう場合は、指使いが違う場合や音の覚え間違いが予想されることから、教員の視覚確認と聴覚確認で指示を行った。そして、レッスン時間内で改善できない箇所は、練習方法を具体的に伝え、自学自習で練習していく提案を行った。

2.2. サブスク型ピアノレッスン

コロナ禍の自粛生活中に自学自習で、疑問に思ったことや質問がある場合などには、メールやコミュニケーションツール等に演奏動画を添付して指導を行う動画レッスンも行った。この動画レッスンはサブスク的なものであるが、新しい楽曲に取り組んだ時に質問がある場合や、課題曲の初見で演奏が心配である場合、自学自習で弾けるようになった時に合格をもらう場合などにも活用することができた。この方法は自学自習を必須とするピアノの練習において、ピアノ経験の有無に関わらず、任意である動画レッスンの提出回数が多い学生ほどレパートリーが増え、バイエルの進度も

速く、主体的な学びへと繋がったといえる。この方法は、動機付け支援の 1 つに電子メールを使った“動機づけメッセージ法⁹⁾”と似ている。本学では 2021 年度は対面レッスンをを行っているが、引き続きサブスク型ピアノレッスンを学生支援の 1 つとして活用している。

2.3. ブレンド型ピアノレッスン

コロナ禍での対面レッスンは、補講が必要と自身で感じた希望者に行った。オンラインでのデメリットとして、双方の楽器が違うことや、細かい表現法や音質の指導が難しい。しかし、対面とオンラインのブレンド型レッスンを行うことで、リアルタイム同期型ピアノレッスンの時に不安がある場合にも、対面とオンラインの教育効果を考えて組み合わせることで解決できた。そして、音色や強弱、音楽的な「間」などの指導、より表現豊かな演奏法の指導には、ブレンド型ピアノレッスンを活用した。

V. ARCS モデルにおけるピアノレッスン

With コロナと After コロナの新しい時代に向けたレッスン方法の展開は、これからますます発展していくと考えられるが、どのような楽器でも演奏の技術習得には自学自習が必須である。対面であってもオンラインであってもピアノレッスンは、学生が自学自習を行い、技術力を積み上げていかなければならない。

継続した練習を行い、自発的にピアノと向き合うには、どのようなレッスン法が考えられるのだろうか。

鈴木(2016)は、できるようになる効果を高めるだけではなく、やってみたくなる学習意欲を継続する手法を目標に据え授業を行うことが必要と述べている。

意欲とは、「行動の方向性と大きさを説明する概念¹⁰⁾」として定義されるが、学習意欲のデザインは、「人のやる気を変化させるような手順やリソースを準備するプロセス¹¹⁾」を指し、学習者の学びの意欲だけではなく、気持ちや人々の意志の強さを高めるためにも活用できるとケラー(2010)は述べている。

1. ARCS モデル

ケラー(2010)によって提唱された学習意欲をデザインする ARCS モデル¹²⁾は、教員が学生の動機づけを高めるために、どう行動すべきかを示す準拠枠であり、4 つの側面「注意(Attention)、関連性(Relevance)、自信(Confidence)、満足感(Satisfaction)」から構成されている。

表 1 の ARCS モデルの 4 要因をもとに、教員がピアノレッスンのプロセスを考え具体化して指導を行うことで、教員自身が方策を探ることができる。鈴木(2016)によると、このモデルを活用することで学生が自分自

身の学習意欲を高めるための手がかりが得られる¹³⁾と述べている。

表 1. ARCS モデルの分類枠、定義および作業質問¹²⁾

主分類枠	定義	作業質問
注意 (Attention)	学習者の関心を獲得する。学ぶ好奇心を刺激する	どのようにしたらこの学習体験を刺激的でもしろくすることができるのか？
関連性 (Relevance)	学習者の肯定的な態度に作用する個人的ニーズやゴールを満たす	どんなやり方で、この学習体験を学習者にとって意義深いものにさせることができるのか？
自信 (Confidence)	学習者が成功できること、また、成功は自分たちの工夫次第であることを確信・実感するための助けをする	どのようにしたら学習者が成功するのを助けたり、自分たちの成功に向けて工夫するための手がかりを盛り込めるだろうか？
満足感 (Satisfaction)	(内的と外的) 報酬によって達成を強化する	学習者がこの経験に満足し、さらに学びつづけたい気持ちになるためには何をしたらよいだろうか？

1.1. 注意(Attention)

ケラー (2010) は、「注意」について、「学習者の関心を獲得する。学ぶ好奇心を刺激する¹²⁾」と定義している。

これをピアノレッスンにあてはめてみると、まず、「目標とする学習観点」として、保育現場で幼児が楽しみながら歌ったり音楽体験できるピアノ演奏技術を養うことが長期目標であることを理解することが必要だと考える。そして学生 1 人 1 人が、自分の技術向上には何が必要か、どのように何を練習すべきか短期目標を知り、自学自習へつなげていく指導が重要である。

「注意喚起の方法と維持する動機付けの観点」として、教材を手にした時、興味を持てるように指導したいと考えている。授業では、弾き歌い教材とバイエル教則本を使用しているが、弾き歌い教材は、手あそび歌の挿絵が載っていたり、学生自身が幼少期に歌った記憶のある曲が沢山あることから取り組みやすい。

しかし、バイエル教則本は、沢山の音符が羅列しており、ピアノ初心者の場合、楽譜を見ただけで難しそうに感じてしまうこともある。そこで、バイエル教則本¹⁴⁾は、「バイエル先生がピアノ初心者の子どもに 2,3 年で段階的にピアノが弾けるように作られた教則本」であり、ピアノ初心者ができるだけ効率よくピアノ奏法を習得する教材としてつくられた教則本であることや、基礎的な楽典をピアノ演奏の進度に伴って順序良く段階を追って進んでいくように考慮された教則本であることを教員が伝えることで、楽譜の見た目に戸惑うことなく取り組むことができる。

さらに、楽曲の構成を説明する場合や、左手の伴奏に苦手意識を持っている場合には、分散和音や同型の伴奏に色ペンや色付箋を使い、和音 (コード) 別にブロックよみ¹⁵⁾ (楽譜 1) で視覚的支援を行うことで、取り組みやすくなる。

楽譜 1. ブロックよみ¹⁵⁾ (バイエル 58 番¹⁴⁾より)



1.2. 関連性(Relevance)

ケラー (2010) は、「関連性」について、「学習者の肯定的な態度に作用する個人的ニーズやゴールを満たす¹²⁾」と定義している。

ピアノの自学自習においてやりがいを感じ、主体的に学び、積極的に取り組むためには、学生自身がピアノレッスンの授業の目的である「保育現場で活用できる演奏技術を身に付ける」ことを再確認し、ピアノを効率よく練習することで自分の近い将来、幼児と一緒に音楽する演奏技術が身に着く学びであると捉えることが必要である。また、弾いている楽曲や使用している教材が、保育の場面で活用できるものと理解し、ピアノ伴奏で子どもたちと音楽することの意味を知っておくことが、積極的に練習に取り組むことに繋がる。

弾き歌い教材は、保育現場で日常的に使う楽曲であるが、自分の知らない曲もたくさんあることからレパートリーを増やす必要がある。また、バイエルの楽曲は保育士や幼稚園教諭の実技試験課題となることがあることや、この両教材の関連する部分として、バイエルで練習した伴奏法が弾き歌いでも活用し技術力の基礎力として活用できる¹⁶⁾ことも、関連付けられることを伝える必要がある。例えば、弾き歌いの伴奏がなかなか上手く弾けない時には、バイエルで同じ型の練習曲 (楽譜 1, 楽譜 2) を選択し、左手のみの部分練習を行うなど関連付けて指導することで、技術向上へつなげることができることもバイエル教則本の練習が必要である理由として挙げられる。

楽譜 2. 雪¹⁷⁾



1.3. 自信(Confidence)

ケラー (2010) は、「自信」について、「学習者が成功できること、また、成功は自分たちの工夫次第であることを確信・実感するための助けをする¹²⁾」と定義している。自信を妨げる不安などの問題点を解決し、自信の度合いを高めることで、やればできるという方向に気持ちを向けることが可能となる。

バイエル 45 番までは、跳躍や指替えではなく、鍵

盤に置いた手の位置で弾けることから、ピアノ初心者
がピアノを弾くことに慣れていくことができる。

弾き歌いの伴奏法は、運指や楽譜に慣れていくため
に、跳躍が少なく複雑ではない伴奏形から練習する。
その後、指またぎや指くぐり、分散和音や跳躍伴奏、
調号や臨時記号の記譜がある曲の練習へと順番に進め、
技術力を養っていく。

難易度が高くなるにつれてピアノを弾く難しさを感じ
ることがあるが、その場合、教員は具体的な練習法
や運指法を個別に指導することで、学生は1曲ずつ習
得していくことができる難しい曲を弾けるようになった
経験は自信につながり、自分で次の課題曲に取り組
んでいくことができるようになる。ピアノ初心者にと
っては、「楽譜通りの伴奏が難しすぎて練習が進まない」
という実態があるかもしれない。その場合、教員がコ
ード弾きの方法や、学生の技術レベルに合った伴奏法
を提供することが、目標に向かう手助けとなる。

1.4.満足感(Satisfaction)

ケラー (2010) は、「満足感」について、「(内的と外
的)報奨によって達成を強化する¹²⁾」と定義している。

毎回のレッスンと自学自習において課題曲が弾け
た！という成功体験や、自主的に課題曲以外にチャレ
ンジし達成したり、自分で伴奏をアレンジして演奏す
ることに相当する。また、実習先で緊張しながらも
保育現場で子どもたちと一緒に歌いながら弾けたこと
も「満足感」に相当する。しかし、とても頑張って練
習して演奏できるようになっていたとしても、子ども
たちの前に出ると緊張してしまい、間違えて止まって
しまうなど学習成果が結果に反映されない場合もある。
保育現場を想定していても失敗はあるが、その原因を
再度自己分析しておく必要がある。

また、緊張しやすいのであれば場慣れの機会を増や
す、本番に限ってミスが多かったのであれば目をつぶ
って練習するなど、自分の課題を多面的に考え改善策
を見出すことが必要である。

「満足感」は、自分にとって価値があり挑戦的な仕
事を成し遂げた喜びから生じる¹³⁾。受け取る評価が努
力と釣り合わない場合は満足感が下がってしまうが、
そのプロセスを肯定的に捉えることで“やってよかつ
た”と感じる満足感を得られる。やらされ感や義務感を
感じてしまうと、難曲を弾いて合格するような高い効
果が得られても長続きしない。その為、教員は継続動
機を与え、達成感を実感させ、学生のニーズに合った
方法を工夫し取り入れなければならない¹³⁾。

VI.調査

2020 年度にピアノレッスンを受講した学生 24 人を

対象に、Microsoft Forms を使用し、年度末にアンケ
ートで調査を行った。調査内容は、「オンラインピアノ
レッスンでも自分のピアノ技術向上が感じられたか、
対面でないとピアノ技術向上にならなかったと思うか」
の選択式の問いと、「バイエルと、弾き歌いの練習をし
ての感想」についての自由記述に回答させるアンケー
ト調査を実施した。

VII.結果

「オンラインのピアノレッスンでも自分のピアノ技
術向上が感じられた」という選択式の問いに対して、

「オンラインのピアノレッスンでも自分のピアノ技術
向上が感じられた」と回答した学生が 96%であった。

「バイエル教則本を練習した感想」、「子どもの歌の
弾き歌いを練習した感想」の 2 項目の自由記述の内容
は KH Coder で分析を行った。KH Coder による分析
は、コンピューターを利用することで分析者の理論や
問題意識によるバイアスをより明確に排除し、分析の
客観性が向上する¹⁸⁾。

1.「バイエル教則本を練習した感想」について

「バイエル教則本を練習した感想」について、24 件
のデータを分析対象とし、KH Coder を用いて前処理
を行った結果、総抽出後数 814 語(異なり語数 203)と
なった。このうち分析に使用される語として 245 語(異
なり語数 104)が抽出された。共起ネットワークを作成
した結果、26 語が使用された(図 1)。

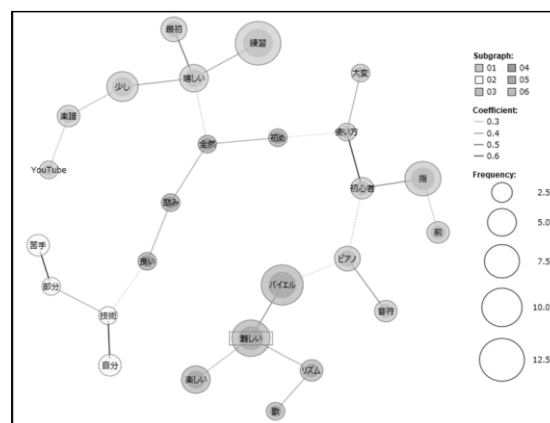


図 1.「バイエル教則本を練習した感想」についての
共起ネットワーク

この結果より、バイエルは難しいと思っていたが、練
習をすることによって弾けるようになった喜びやピア
ノを弾くことの楽しさや嬉しさを感じていることが理
解できた。また、初心者は難しいと感じていた指使い
や運指を、理解できたことで苦手な部分を克服できた
ことが伺えた。技術向上には自分が弾けない部分を知

って部分練習することで、練習が進んでいったことが分かった。

2. 「弾き歌いを練習した感想」について

「弾き歌いを練習した感想」について、24 件のデータを分析対象とし、KH Coder を用いて前処理を行った結果、総抽出後数 821 語（異なり語数 190）となった。このうち分析に使用される語として 319 語（異なり語数 127）が抽出された。共起ネットワークを作成した結果、26 語が使用された（図 2）。

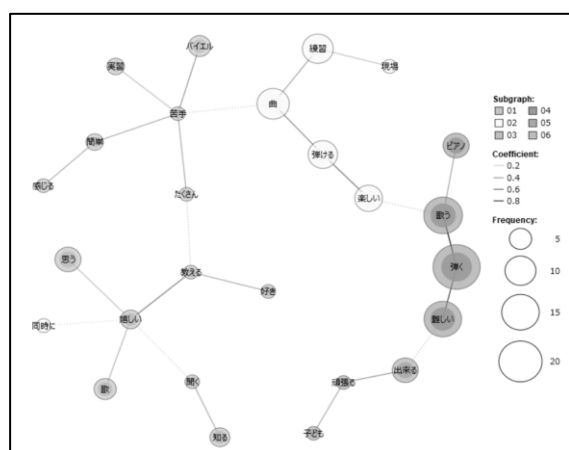


図 2.「弾き歌いを練習した感想」についての
共起ネットワーク

この結果より、ピアノ経験者がピアノ曲を弾けたとしても、弾くことと歌うことを一緒に行う弾き歌いは、難しいと感じていることが分かった。練習して弾き歌いできるようになると楽しくなり、保育現場で役に立つことが想定できている。また自学自習で練習しても上手く弾けなかった部分を、どのようにしたらできるようになるか教員に教えてもらうことで苦手な曲も演奏できるようになっていったことが分かった。

VII. 考察

保育士養成校の学生のピアノレッスンの目的は「保育現場で活用できる演奏技術を習得する」ことである。音楽を通して子どもたちが季節を感じたり、日常生活を楽しむことができるようにするためのピアノ技術の習得である。しかし、入学時のピアノ経験の有無によってスタート曲も違い、教材の進度やペースも個別で異なっている。

ピアノ経験者であればバイエルを全曲弾きこなし、さまざまなジャンルの楽曲を弾いてレパートリーを増やし、弾き歌いの伴奏ではアレンジ法を習得し、より音楽的な表現などに取り組むことが目標となる。

ピアノ初心者であれば、楽譜を理解しピアノを弾くためにはどのような方法が自分に合っているか手段を

見出し、伴奏法の工夫を行い、保育現場で活用できる演奏技術を習得する。初心者の伴奏法はさまざまで、単音でコードのベース音を弾く伴奏、楽譜通りに弾く伴奏、コード弾きの伴奏など、自分の技術に応じた伴奏法を取得し、段階的にステップアップしていくなど、個別の手段・手法で目標に向かうことが求められる。

このようにピアノレッスンでは、教員は学生の自学自習の練習方法や環境、モチベーションを維持するために、個別指導が重要¹²⁾である。自学自習が必須であるピアノレッスンは学生1人1人が目的を自覚し、自分の目標に向かっていかなければならない。教員がARCSモデルの側面から捉えることで、どのような通過点にいて、どのような練習が必要であるのか見えてくることから、具体的な練習方法を提示することが可能となり、学生が自学自習に向かいやすくなる。また、オンラインピアノレッスンにおいてもARCSモデルの有効性が実感できたといえる。

ピアノを練習したかしていないかは演奏を聴くだけで一聴瞭然であるが、単純に練習をしなかったのではなく、練習方法の手順がよくないことや、練習方法が分からないことでピアノから遠のいてしまうことも想定される。また、「アルバイトなどで忙しかったので練習ができなかった」「時間はあるが、練習に向かえない」という場合、学生自身がタイムスケジュールを見直し、具体的にいつどの時間で練習ができるか把握し、タイムマネジメントすることが必要である。この場合、教員は動機づけの基本的前提に立ち戻らなければならないが、教員がそれらを示唆し、音楽が心身の健康に関連していることや、学生の好奇心や演奏技術の向上への期待などに対応したとしても、必ずしも学生の態度変容が期待できるわけではない。学生がその科目を学びたいという気持ちになった上で、目的に向かう手段や練習方法を提示することが必要となってくる¹⁹⁾。

今回、アンケートの自由記述内容を KH Coder で分析することで、バイエルは解説をしながら練習方法を伝えることで譜面より簡単に弾くことができたことや、部分練習をすることで弾けるようになっていき、技術向上への実感が持てたことが分かった。弾き歌いでは、弾くことと歌うことは別物で、ピアノ経験者であっても難しいと感じる学生がいたことがわかった。

自学自習では個々の問題点に対し、教員が具体的な練習方法を示すことで取り組みやすくなり、動画レッスンなどのサブスクを使うことで、自分のペースで進めることができた事もわかった。学生自身も、ピアノ練習の目的が技術向上だけではなく、保育士になり現場に出てからも、音楽の役割の重要性を感じ、自身が音楽することへの生涯学習の視点を見出していけることを願いたい。

VIII.謝辞

本論文作成にあたり、御助言御指導いただきました名古屋市立大学大学院人間文化研究科古賀弘之准教授に心より感謝御礼申し上げます。アンケート調査・写真提供にご協力頂きました学生の皆様に感謝御礼申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 世界保健機構(WHO)：新型コロナウイルス感染症(COVID-19)WHO 公式情報特設ページ。
https://extranet.who.int/kobe_centre/ja/covid.
2021.10.6 閲覧。
- 2) 斎藤豊：子どもの学習意欲に着目した音楽の授業デザイン-ARCS モデルを採用した和太鼓の音楽づくりを通して-。音楽教育実践ジャーナル vol.13(2),54-65(2016)。
- 3) J.M.Keller,鈴木克明監訳：学習意欲をデザインする,北大路書房,306(2010)。
- 4) 文部科学省：幼稚園教育要領,平成 29 年告示,
https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_2.pdf.
2021.10.6 閲覧。
- 5) 丹羽裕紀子,古賀弘之,小田紀子：インクルーシブ保育における音楽表現,名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究紀要(30),35-44(2018)。
- 6) 大角玉樹：オンライン講義におけるアクティブラーニングの試み・コロナ禍における教育のデジタルイゼーションと講義デザイン-,琉球大学経営研究(1),50-59(2021)。
- 7) 京都大学高等教育研究開発推進センター
<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/teachingonline/hybrid.php>
2021.10.6 閲覧。
- 8) 仲道雅輝：大学教育の更なる活性化を目指して-オンライン授業設計の要点と今後の課題-：教育学術新聞第 2814 号,(2020.9.2)。
- 9) Visser,J.&Keller,J.M:The clinical use of motivational messages:An inquiry into the validity of the ARCS model of motivational design,
Instructional Science19,467-500(1990)。
- 10)J.M.Keller,鈴木克明監訳：学習意欲をデザインする,北大路書房,2-5(2010)。
- 11)J.M.Keller,鈴木克明監訳：学習意欲をデザインする,北大路書房,23(2010)。
- 12)J.M.Keller,鈴木克明監訳：学習意欲をデザインする,北大路書房,45-78(2010)。
- 13)鈴木克明監訳：インストラクショナルデザインの道宝箱 101,北大路書房,2-19(2016)。
- 14)堀内久美雄：バイエルピアノ教則本,音楽之友社,(2006)。
- 15)丹羽裕紀子：ソルフエージュを用いた初心者へのバイエル指導法,名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究(28),171-187(2017)。
- 16)丹羽裕紀子：保育士養成校における弾き歌い段階的伴奏法-バイエル教則本の利点を用いた練習-,日本教材学会教材学研究(32),43-52(2021)。
- 17)文科省唱歌,ケロボンズ監修：ピアノ伴奏こどものうた 131 より雪,成美堂出版,169(2014)。
- 18)樋口耕一：テキスト型のデータ計量的分析-2 つのアプローチの峻別と統合-理論と方法 9(1),101-115(2004)。
- 19)J.M.Keller,鈴木克明監訳：学習意欲をデザインする,北大路書房, 306-309(2010)。